



## テスト作りの研修

根岸 雅史 Negishi Masashi  
(東京外国語大学)

### 1. High-stakes な日本の定期試験

言語テストは、high-stakes なものと low-stakes なものに分けられる。Green (2013) は、これらに関して “A high-stakes assessment has important consequences for the assessee (such as access to job opportunities); a low-stakes test does not.” としている。

一般に、入試や検定試験のような大規模テストは high-stakes test とされ、定期試験のような classroom assessment は low-stakes test とされるのかもしれない。しかし、Green (2013) が “The same assessment may be high stakes for some assesseees, low stakes for others.” と述べていることからわかるように、classroom assessment だからといって全てが low-stakes とはならない。

日本における定期試験の結果は、評定を決定する重要な資料となり、その評定は入試につながる内申書に反映される。この意味では、日本における定期試験は、れっきとした high-stakes test ということができる。日本の定期試験の問題は、生徒にとっての重大な結果をもたらす high-stakes test でありながら、作成者である教師が十分な専門的トレーニングを受けていないために、さまざまな問題を抱えていることが往々にしてあるという点だ。

### 2. 定期試験作りにおける慣習

だからこそテスト作りの研修が必要なわけだが、仮に評価やテストについての研修に参加したとしても、必ずしも評価やテストに関する見直しや改善という具体的な行動に結びつくわけではない。という

のも、教師の多くは、自分のテスト作りのパターンが確立しているからだ。研修を受けてそこでなされる提言にある程度納得しても、自分のテスト作りの慣習があまりにも確立していて、どう変えてよいかわからない。あるいは、研修から戻り、しばらくたつと、もとの慣習に戻ってしまうことはよくある。

こうした慣習の多くは、教師自身が中高生の時に経験したテストに由来すると考えられる。「定期試験とはこういうものだ」というイメージが、そこで形成されるのだ。さらに、教員になり、同僚の先輩教員から指導されることもあるだろう。しかし、こうした先輩教員も同じような形でテスト作りの慣習を身につけているため、引き継がれる定期試験の慣習がテスト作りとしての問題を抱えていた場合、その問題は世代を超えて引き継がれることになる。

もう一つの問題としては、いいテストを「見る目」がないということもあるかもしれない。実は、世の中にはモデルとなるようなテストがないわけではない。しかし、「見る目」がなければ、目の前にたとえいいテストがあっても、素通りしてしまう。

### 3. 研修の第一手：定期試験を見せる勇氣

こうした問題を克服するためにも、テスト作りの研修が必要ということになるのだが、教員研修では授業についての研修が多数を占め、テストについての研修は極めて限定的である。

研修というと、恩師の故若林俊輔先生の言葉を思い出す。先生は英語科教育法の授業で、「体育の教師はすごい。毎日授業を公開しているのだから。」とおっしゃっていた。ただ、まだ学部生だった私には、先生のおっしゃる意味がピンと来ていなかった。しかし、今思えば、教室の中で授業をしている（英語

科のような教科の) 教師には、すべての授業を他人の目にさらすというのは勇気の要ることだ、ということとはよくわかる。しかし、他人の目に触れるからこそ学ぶこともある。

では、テストはどうだろうか。実は、テストは公開されている。生徒や保護者、さらには塾関係者にも実質的には「公開」されている。ただそれは、彼らの「目に触れている」だけで、そのテストの是非を検討するために公開されているわけではない。授業をよくするために公開授業をするのであれば、テストをよくするためにもテストを公開して、それをもとに議論するべきであろう。

#### 4. 研修の次の一手：テストを見る目を養う

研修では、テストを公開した上で、議論を行うことになるが、そのためにはテストを「見る目」を養う必要がある。テストには、実にさまざまな要素があり、視点を統一せずに議論を始めてしまうと、收拾がつかなくなってしまう。

テストの研修でまず必要なのは、言語テスト理論についての基本的な知識だろう。ここでは、少なくとも、言語テストの妥当性・信頼性・実用性・波及効果といった概念とそれらのテスト作りへの具体的な関連性について、共通理解を図る必要がある。

ただ、その際、言語テストの文献を参照するかもしれないが、その多くは、大規模テストや熟達度テスト (proficiency test) を前提としているために、そこで書かれていることがすべてそのまま到達度テスト (achievement test) としての定期試験に当てはまるわけではないので注意が必要だ。入試や能力判定のための熟達度テストでは、能力の弁別を正しく行うために、なるべく難易度も内容も幅広くカバーするように出題されている。それに対して、定期試験は、比較的短期間の特定の指導と学習の成果を見るために、テスト内容は極めて限定されることになる。文法問題で言えば、バラバラの文法項目を多岐にわたって出題するのではなく、特定の文法項目に絞って集中的に出題することになる。

#### 5. 研修の最後の一手：定期試験のモデルの提示

英語の教師がテスト作りの悪しき慣習から抜け出

せなかったのは、定期試験の「モデル」が提供・共有されてこなかったことも原因だろう。確かに、定期試験の「モデル」といっても、指導目標や授業のやり方によってさまざまな「モデル」があり得る。しかし、ある程度汎用性のある形は提供できるはずだ。

私が研修で関わったいくつかの地域では、教育センターや地域の中心となる学校が主導して、モデルとなる定期試験を作成し、その地域の先生方に配布している事例がある。もちろん、これらは右から左に使えるわけではないが、電子ファイルで配布しているので、そのファイルに上書きしていくと、モデルに沿った自分の定期試験を作成することができる。こうしたモデルが、技能や言語材料ごとに整理されたきれいな問題構成であれば、教師のテスト作りの慣習で、ごった煮の総合問題を作ってしまうようになっていたとしても、そうした問題が出題される余地はなくなるだろう。

#### 6. 最後に：定期試験作りの難しさ

定期試験は特定の指導に関連付いたテストである。そのために、テストング・ポイントを指導目標に関連づけようとするが、その際、言語テストならではの難しさがある。その指導内容が言語的な独立性の高い文法や語彙などの項目ならいいが、さまざまな言語知識を統合して使わなければならない技能のテストとなると、指導目標に関連付けるのは言うほど簡単ではない。

たとえば、「物語を読んで、そのあらすじをとる」ことが指導目標になっていても、「読む」という言語活動が統合的であるために、指導目標だけに焦点化したテストを作ることは容易ではない。ある読みの技能をねらって作成したリーディング・テストで生徒が不正解であった場合でも、読む技能の問題ではなく、言語知識の不足から不正解になってしまう可能性もあるのだ。

日本における定期試験作り、まだまだ解決しなければならない課題がある。

#### 【参考文献】

Green, A. (2013). Exploring language assessment and testing: Language in action. Routledge.